

通化とか集安という文字を見てすぐピンとくる人は、かなりの中国通である。私ももちろん大連に赴任するまで知らなかった。今回の都市巡りの表題は「通化市と集安」であるが、まず集安から書き進めていきたい。

大連滞在中のある日、社宅で中国の地図を見ると、吉林省・通化市の南、国際河川の鴨緑江に面している集安という街のあたりに「高句麗王城・王陵及貴族墓葬」と記してあるのが目に飛び込んできた。高句麗(BC37年～AD668年)といってもその昔、朝鮮半島で高句麗・百済・新羅の三国の時代があり、663年に日本(倭国)と百済連合軍が唐・新羅連合軍に白村江の戦いで敗れ、その後高句麗は唐によって滅亡したとくらいしか知らず、しかも高句麗は中国ではなく北朝鮮に当時の遺跡があるのだらうと思っていた。ところが中国にもあったのだ。

あらためて世界遺産の本を見ると、2004年に中国では「古代高句麗王国の首都と古墳群」として、北朝鮮では「高句麗古墳群」として仲良く文化遺産として登録されていることが分かった。高句麗は北朝鮮から中国の東北地方に版図を広げていたというのであるから、両国に遺跡があるわけである。

北朝鮮にある遺跡は簡単には行けそうもないので、ここはどうしても中国側の遺跡を見に行こうと思った。しかも壮麗なる好太王碑もその地にあることがわかった。

「好太王碑」はご記憶のある方も多いと思われるが、私は高等学校の歴史の教科書に写真入りで説明されていたのを思い出すのである。好太王(374年～412年)は高句麗19代の王(正式名: 國岡上廣開土境平安好太王、で韓国では広開土王と呼ばれるそう)であり、その碑には当時の日本(倭)に関する



る記述が彫りこまれているので有名であるのはご承知の通りである。私の頭の片隅に巨大な縦長の石碑の写真がはっきり残っていたので、今回半世紀にわたる思い出が形となって実現するのではと思うと胸がワクワクしたものだ。

中国人の友人に「集安という街にある高句麗の王城と好太王碑を是非見に行きたい」というと、友人は「寺西さんは物好きだね。そこは当時の王様や貴族の墳墓や記念碑があるだけで、あまり行く人はいないよ。

でも行きたいのなら連れて行ってあげるよ」と言ってくれた。とはいえ簡単に行ける所ではなく、大連駅から寝台列車に乗って通化駅まで行き、そこからバスで2時間くらい掛けて集安まで行かねばならない。彼は親切にも汽車の切符の手配やホテルの予約などしてくれ、数日後大連駅から出発することになった。

2009年3月19日、私達は大連駅のホームに停まっている通化行き寝台列車(K7385)に乗り込んだ。そして列車は16時21分滑るようにホームを離れて行った。寝台はセットしてあるがまだ外は明るいので窓際に向かい合うようにして座っ



埼玉県日高市・聖天院境内の慰霊塔脇に立つ「好太王」像

た。台の上にお湯の入ったポットが置いてあった。私は寝台列車が好きである。学生時代、故郷の広島から東京までたびたび“安芸”という寝台急行に乗って上京したものである。懐かしいしやはり新幹線より旅情がある。

話が弾んだが寝る時間になったので横になった。列車は、瀋陽→四平→梅河口→の順で走り、翌朝の6時30分頃に通化駅に滑り込んだ。日本のようにダイヤ通りぴったりとはいかないが、10分近く遅れたくらいで到着した。先ずバスターミナルに向かい、集安行のバスの時間を確認した後、腹ごしらえをすることにした。友人は中国人なので万事スムーズに事が運び、私は言われる通りについていくだけでとても気楽であった。

ここで中国の東北地方から朝鮮半島にかけてもう少し歴史を振り返ってみたい。

この地方は日本に近いだけあって幾つかの国は日本といろいろな形で交流があり、また争いもあった。前出の三国の中では百済との関係が深かったと言えようが、高句麗も長い歴史の中で多くの接触があり、また国が滅んだ時その遺民がかなり日本に逃れて来ているなど、知れば知るほどこの両国は身近に感じられる。

高句麗という国は歴史書には中国東北部から朝鮮北部に居住していた貊族(はくぞく)というツングース系民族が興した国とある。百済も同じツングース系民族とあるが、新羅は両国とは違う民族のようだ。三国はお互いに手を結んだかと思うといつの間にか対立しており、これに中国が陰に陽に絡んでいるので三角関係はとても複雑で説明しようとしても私の手に負えない。

高句麗はこの地を700年余り支配して668年に滅亡したのだが、その地にやがて渤海(698年～936年)という国が興り、228年間この地に栄えた。歴史の流れを見ると、例えば中国で例を挙げると隋の次は唐になったわけであるが、隋を建国した文帝の皇后と唐を建国した高祖(李淵)の父(李昝)の夫人は姉妹であり、言ってみれば親戚関係でつながっていると言えよう。

渤海はといえば、実は高句麗は滅亡したがその遺民である「大祚榮」が同じツングース系の“靺鞨”と共に興した国なのである。つまり高句麗は唐に滅ぼされたとはいえ、約千年続いたと見ることができる

のではなからうか。全く違う民族が征服する例もいくつもあるが、底流でつながっている国家も多い。

渤海は日本(倭)と縁の深い国である。遣唐使ならぬ「遣渤海使」は15回を数え、両国は34回も使者が行き来した。当初は新羅を牽制するための軍事的な性格を帯びていたらしいが、後半は文化、経済交流に変わっていったようである。私はこのような交流に加え、大連に赴任していたからか「渤海」という名に親しみを感じている。渤海は海の名称でもあり、遼東半島と山東半島の懷に抱かれている海であるが、実は「渤海国」はこの海に面していない。この国の名称は、前述の大祚榮が渤海沿岸にあった「渤海郡王」に封ぜられたことにより付いたものだそうである。渤海について敷衍すれば、近年その歴史的地位が韓国・北朝鮮からすれば〈朝鮮民族の王朝である〉とし、中国からすれば〈中国の少数民族による地方政権である〉とみて両国間で歴史論争が発生しているようだ。

さて集安行のバスに乗り込み約2時間、車窓からの風景を楽しんでいるうちに集安市街に到着した。集安は「市」ではあるが県級市であり、地級市の通化市より一ランク下である。人口も20～30万人で通化市はその十倍はいる。同じ「市」でも集安市は通化市の中の一行政区に過ぎない。

しかし、これから述べるように2千年前は高句麗の都が置かれた地であり、この地に住む人の気位は通化市より上かもしれない。こじんまりした街であるが、なぜ高句麗がこのあたりに都を置いたのか、地政学的にどのような利点があるのか分からない。最初はここから西に100キロメートルくらい離れた山岳地帯の「五女山山城」(遼寧省)に都を置いた。約40年後に集安市内に遷都し、209年にさらに同じ集安市ではあるが近郊の丸都山城に遷都した。それから427年に北朝鮮の平壤に遷都した。

私たちはタクシーに乗ってまず丸都山城に向かった。タクシーは山あいの少し開けたところに我々を降ろした。そばには鴨緑江の支流である小さな川が流れていた。川の土手から眺めると前方にいくつもの小さな石のピラミッドが散在している。盛り土した墓もあった。

エジプトのピラミッドとは比べるべくもないが日本にはもちろん見られない光景である。一つがおよそ5メートル前後の高さと思われた。中国語でピラ



ミッドは形が「金」という字に似ていることより「金字塔」というが、確かに金の字に似ている。近くに行くと意外に大きいのに驚いた。一つ一つの石も大きいのだが、どこからこれだけの石を切り出してきたのだろうかと思った。この場所のお墓はすべて運転手の話だと高句麗貴族の墓だそうで、歴代の王の墓は少し離れた「禹山墓区」にあるという。

3世紀から5世紀にかけて君臨した王の墓が14基あるそうで、平壤に遷都してからの墓は平壤のどこかにあるのであろう。古に思いを巡らせながら少し散策した後、待たせてあったタクシーに乗りいよいよ好太王碑に向かった。この碑も禹山墓区の一部にあった。

先ほどの丸都山城もそうであったが、この場所も友人が言っていたように世界遺産であるのに観光客は一人も見当たらない。それでも入り口で30元払って中に入る。中国は雇用対策もあるのか、ちょっとした場所でも入場料を取られる。3月20日は春分の日で日本は祝日であるが当時中国はどんな扱いだっただか思い出せない。しかし静かにゆったりと見られるのはありがたい。中国の観光地はどこに行っても人出が多く、しかも騒々しいからだ。

好太王碑は威厳を持って我々を迎えてくれた。その前に立った時、碑の大きさに驚きかつ1600年もの歳月が醸し出したのであろう圧倒的な迫力を感じずにはいられなかった。高等学校の教科書の写真と違うのは、高さ6.3メートルの石碑が瓦屋根がのっかり周囲をガラス張りにした建物の中にあつたことだ。

この碑は好太王が崩御した2年後、第20代の王となった長寿王が父の功績を称えて414年に建立したものである。高句麗は好太王の時最盛期を迎えているのだ。惜しまれるのは38歳という若さで亡

くなったことだ。ちなみに昨年の7月からその偉大な王を称えた「広開土太王」と題するドラマがBS4で始まった。2011年に韓国で放映されたものである。脚色されているとはいえ、比較的史実に沿った内容と思われ面白い。

碑文は1802文字というが少なくとも50年前ま

では風雨にさらされていたわけであり、そのため文字の一部が欠落していたり読みづらくなっていた。もっと早くからこの碑の重要性に気づき、保全措置がとられていたらと残念に思うが、いくつもの国や民族が興亡を繰り返していた地だけに仕方のないことかもしれない。

それから禹山地区の北東端に「將軍墳」に向かった。集安で一番有名な金字塔である。ここでも入場料を30元支払う。この墳墓は小高い丘の上であり、7段ある石のピラミッドは他を圧して聳え立つ感じである。一つ一つの積み上げられた石も大きい。

最上段は平らになっていて尖った三角形ではない。堂々たる姿から「將軍墳」と呼ばれるが、四角形の底辺の一边が約32メートル、高さは12.4メートルもある。自由によじ登っていいので上がると、

頂上からの眺望はすばらしい。ただこれだけ有名な墳墓であるが、誰の墓なのか特定されていない。調査の結果は好太王かその次の長寿王の墓と推定されているそうであるが、私は好太王の墓と思いたい。

このようにいくつもの遺跡を巡っていると集安という街は古墳群の中に取り囲まれているのがわかる。これからも高句麗王朝を守れという使命を与えられた街に見えた。集安については、このあたりで終わり通化市に移りたいが、その前に高句麗に関して最後に一つ書き加えたい。以下は次号に譲りたい。

(続く)



ガラス張りの建物に安置されている好太王碑



將軍墳